

Book Review



歯界展望別冊 トラブルを起こさない局所麻酔

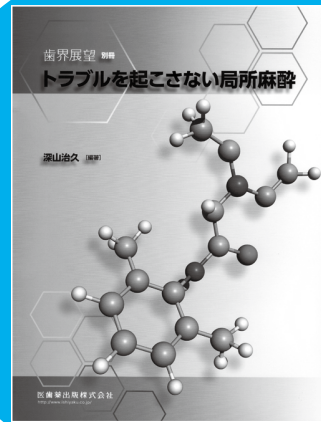
深山治久 編著



Reviewer

宮崎真至 Masashi Miyazaki
(日本大学歯学部保存学教室修復学講座)

A4 判変, 128 頁
オールカラー
定価 (本体 5,800 円+税)
医歯薬出版刊



Minimal Intervention という治療概念に基づいてコンポジットレジン修復を行う際には、いかにして歯質の削除を最小限にとどめるかを考えるものである。その背景には、感染歯質のみを慎重に切削することで無麻酔下での修復処置を行うことを可能とするという目的があり、いわゆる「無痛修復」の実践である。すなわち、除痛法を行うことなく、快適な歯科治療を行うことが最重要項目にあげられる。したがって、現在の保存修復処置においては局所麻酔が用いられる頻度はきわめて少なくなったといえる。しかし、除痛法があるからこそ、歯科医師は確実な歯科治療を行うことができるのもまた事実である。

歯科臨床に関する成書によれば、除痛法としての局所麻酔は、治療における前準備あるいはその補助法として位置づけられている。局所麻酔を行うこ

とによって、患者にとっては快適な歯科診療を受けることが可能となり、術者にとってはストレスのない施術の遂行につながる。歯科医師であれば、誰もがやっている局所麻酔ではあるが、想定した効果が得られずにその後の処置が難渋することも経験されるところである。本来の目的である処置が、局所麻酔の効果が得られないために行うことができないことは、術者とともに患者にとっても不本意極まりないことである。いつも行っている術式に従っているのに、なぜ麻酔効果が得られないのか、局所麻酔の先にある処置ばかりを考えていると、起こりがちなことでもある。

本書は、日常の臨床において局所麻酔時に遭遇する可能性のある不快事項について、歯科麻酔の専門家とともに、保存、補綴あるいは小児歯科などの専門領域で日々臨床に携わっている

エキスパートを著者として迎えている。臨床におけるさまざまなケースを想定して、起こりうるトラブルをいかにして未然に防ぐのかが、「臨床目線」で記述されている。日々の臨床をスムーズに行うために必要な処置であるものの、その留意事項に関して改めて気がつかされる内容である。歯科麻酔専門家である編者が、一般臨床の視点から安全で効率的な局所麻酔の実践を考えたとき、本書の構成となったものと推察する。わかっているようで、忘れがちな臨床の留意点が仔細にわかりやすく解説されており、改めて自分の臨床の傲慢さが認識できた書であった。

本書が活用される場面は、あまり多くないにこしたことはないのであるが、ぜひとも日々の臨床に役立てていただきたい。